

南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト
 研究調査報告書
 2013年度

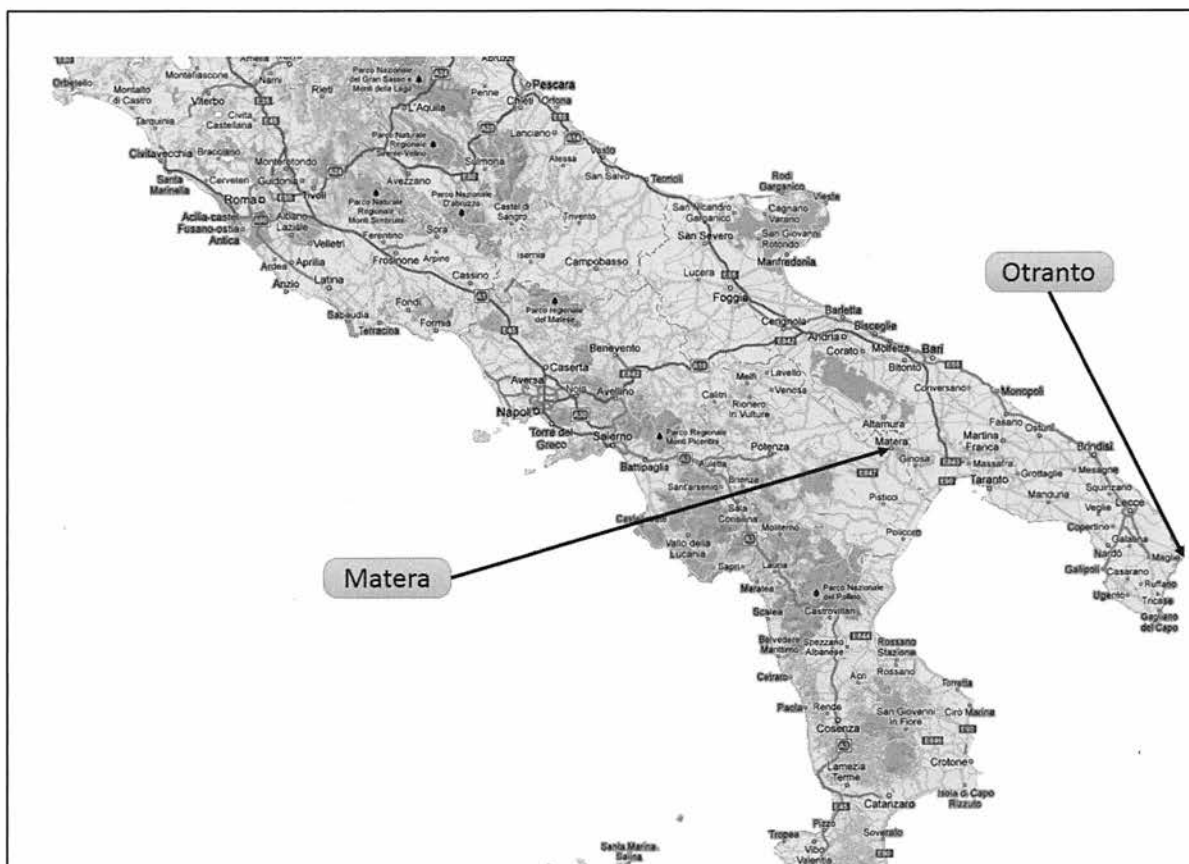
宮下孝晴*・宮下陸代**

Analysis-Research Project on the Medieval Cave Churches in South Italy:
 Report of Pre-field Researches 2013

Takaharu MIYASHITA* & Mutsuyo MIYASHITA**

◇ 第八次予備調査実施日：2013.09.08～09.11

Regione Basilicata, Puglia



◇◇◇ 調査地リスト ◇◇◇

- No.53 [Otranto] Cattedrale di Santa Maria Annunziata
- No.54 [Otranto] Chiesa di San Pietro
- No.16(再) [Matera] Convicinio di Sant'Antonio
- No.18(再) [Matera] Chiesa di Santa Lucia alle Malve
- No.19(再) [Matera] Chiesa della Madonna de Idris
- No.19(再) [Matera] Chiesa di San Giovanni in Monterrone

☆ **keywords:** mural painting, Middle Ages, cave-church, South Italy, conservation
 壁画、中世、洞窟教会、南イタリア、保存

* フレスコ壁画研究センター長 人間社会研究域 歴史言語文化学系教授

** フレスコ壁画研究センター客員研究員

現地調査を重ねるにつれて浮かび上がってきた洞窟教会群の実態

～ 南イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画群の診断調査プロジェクト ～

ここに掲載する南イタリア（プーリア州）2カ所の教会堂内に描かれた中世の壁画遺産に関するレポートは、昨年度に続いて実施された今年度の現地調査記録を整理したものである。したがって、調査地リストの整理番号は昨年度の報告書《No. 42～No. 52》を継続して、《No. 53》から始まっている。ただし、昨年度も同様であったが、今年度もまた調査対象がすべて「洞窟教会」というわけではない。本プロジェクトの研究対象は洞窟教会に描かれた中世壁画であるが、南イタリアの中世壁画の系譜研究にあたって図像様式的に重要で参考となる作例については、描かれた場所が洞窟教会堂内でなくても調査の対象として収録した。

今年度はプロジェクト（実地調査）最終年で、9月の本調査は終了した。したがって、毎年1月に行ってきた次年度のための予備調査を実施する必要がなく、9月の本調査の機会にオートラントとマテーラの町にのこる重要な中世壁画を調査した。ただし、世界遺産にも登録されているマテーラは以前にも何回か訪れて調査を行っており、すでに『研究調査レポート Vol. 1』に収録済みのため、整理番号の表からは外してある。

南イタリアの洞窟教会に描かれた中世壁画群の調査研究プロジェクトとは、金沢大学が日伊共同で取り組んできたフィレンツェのサンタ・クローチェ教会壁画（大礼拝堂に描かれたアーニョロ・ガッディの壁画連作「聖十字架物語」）の修復プロジェクトの成功実績に基づき、文部科学省の特別経費を得て、再び国立フィレンツェ修復研究所と連携協力して、2010年度から4年計画でスタートしたものである。2010年5月には、本プロジェクトの研究拠点として金沢大学人間社会研究域に「フレスコ壁画研究センター」が設置され、人文系、芸術系、工学系、医薬系などの多岐にわたる専門分野の研究員が協力して中世洞窟教会壁画の調査・分析・研究に取り組む文理融合型プロジェクトがスタートすることになった。

現地から移動させることのできない洞窟教会壁画の非破壊調査と未来型デジタル・アーカイブの形成を目指す金沢大学チームは、最新のテクノロジーが結晶した日本の小型デジタル機器を（電気設備などのない）荒涼とした南イタリアのフィールドで活用する可能性の追求にも重点をおき、（研究所内ではなく）

フィールドでの壁画調査に特化した小型診断機器の開発にも努力している。

拡散光と斜光線による高精細デジタル撮影のほか、GPS記録、気球による空撮、2種の3Dスキャナによる建築空間と壁画面の凹凸記録、赤外線サーモグラフィ、色差計、水分計、マイクロスコープなどの科学計測機器を用いての分析診断データは、国立フィレンツェ修復研究所の壁画調査チームが実施担当する（絵具層のサンプリングなどの破壊調査を含む）他の調査データと統合され、「文化財保存」「専門研究」「教育と啓蒙」などの目的に応じた新形式のデジタル・アーカイブ（データベース）に記録される。

とりわけ、「文化財保存」の観点から形成されるデジタル・アーカイブは、洞窟教会に描かれた中世壁画の現状記録のみならず、将来にわたって定期的実施されるであろう診断調査の《症状と経過》を記録し、南イタリアの洞窟教会壁画が直面している諸症状を系統的に把握することができる、いわば「壁画保存の電子カルテ」の機能を果たせるシステム・フォーマット（Modus Operandi）が、本センターとイタリアのクルトゥーラスオーヴァ社との連携協力で開発中である。（Culturanoova S.r.l 代表：Massimo Chimenti）

文化行政的には放置されているかに見える南イタリアの洞窟教会も、実際にはまったく見捨てられているわけではなく、（ごく限られた人々ではあるが）現地の人々の大きな郷土愛で余命を繋いでいるものも少なくないということもわかってきた。遠い極東の日本から南イタリアに遠征していく金沢大学チームとしては、これからも現地との友好的かつ学術的な協力関係を深めながら、危機に瀕している中世の洞窟教会壁画群を人類の文化遺産として長く歴史に記憶させるべく、今後でも有意義なプロジェクトの継続と展開を模索していくつもりである。

Ringraziamento :

Desideriamo esprimere la nostra più sentita gratitudine ai seguenti signori.

■Dott. Fabrizio Vona (Soprintendenza di Puglia)

■Dott.ssa Fulvia Rocco (Soprintendenza di Puglia)

No.53	サンタ・マリア・アンヌンツィアータ大聖堂	Regione 州	Puglia
Pug.39	Cattedrale di Santa Maria Annunziata	Comune 市町村	Otranto

① 地理的位置

N 40° 8' 45.581" / E 18° 29' 27.283"

サレント半島の東岸に位置するイタリア最東端の町オトランートのいちばん小高くなったところに建設されている。

② 建築に対する所見

丘の斜面に建つ大聖堂は、まずクリプタ（地下祭室）が 1080 年に建設され、ついで地上に建つロマネスク様式の本堂が 12 世紀後半に完成した。基本プランに大きな変更はないが、1480 年のトルコ軍の急襲による激戦後、部分的な改築が行われ、17 世紀には正面扉周辺にバロック様式の装飾が加えられた。室内は 14 本の円柱が半円連続アーチを支える 3 廊式バシリカ型で、ロマネスク特有の柱頭装飾も見られる。天井はイスラム建築のスタラクタイトの木製格天井（1698 年）で、床面は内陣の奥まで 700 m²以上の面積をモザイク画が覆い尽くしている。このモザイク画は修道士パンタレオーネが 1163-66 年にかけて制作したもので、背中合わせの 2 頭の像から伸びた「生命の樹」の枝の間に旧約聖書中の物語、古代神話の主人公たち、「月暦」「黙示録」の動物たち、「天国と地獄」など、豊富なモチーフが組み合わさっている。

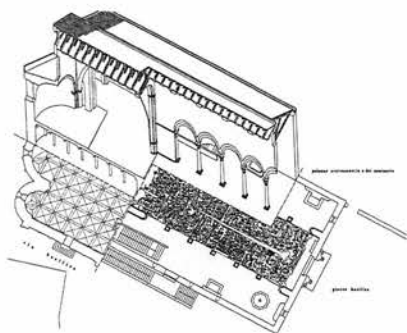
③ 壁画に対する所見

床面の大胆なモザイク画に呼応して室内の広い壁面にも壁画が描かれていたと言われるが、1480 年にトルコ軍が占領してモスクとするために破壊。中世の壁画では右側廊奥の左壁に描かれた 13 世紀と推定される「聖母子」（写真参照）だけが、わりあい良い状態で発見されている。（様式的にはマテラ大聖堂の「ブルーナの聖母」、マッサーフラのマドンナ・デッラ・スカラ聖所記念堂の「聖母子」（13 世紀）に類似。cf. vol. 2, p. 11）そのほかにも壁画の断片がいくつかのこっちはいるが、傷みがはげしい。ファサードを入った左右の「聖母子」と「聖（大）アントニウス」の壁画は 17-18 世紀に描かれたもの。また、42 本の列柱に支えられたクリプタにも「聖母子」をはじめ、12 世紀以降の壁画断片がのこるが、多くは主題の判読も難しい。

④ 保存状況

中世壁画に限定すれば、図像学ならびに壁画技法の点からみて、右側廊奥の左壁に発見された 13 世紀と推定される「聖母子」のみが保存状態も良く、今後の研究対象として重要である。

平面図



No.54	サン・ピエトロ教会	Regione 州	Puglia
Pug.40	Chiesa di S. Pietro	Comune 市町村	Otranto

① 地理的位置

N 40° 8' 44.349" / E 18° 29' 33.433"

ガリバルディ通りからポポロ広場へ向かい、サン・ピエトロ通りとなっている狭い階段を上りつめたところに位置する。

② 建築に対する所見

9世紀頃に創建されたビザンティン様式の教会で、オートラントの旧大聖堂であったと考えられている。小さいながらも中央に円筒式円蓋をもった内接ギリシア十字型プランの教会の原形をよくとどめ、4本のどっしりとした円柱がドームと周囲のトンネル・ヴォールトを支えている。身廊は3つに分けられ、半円球の後陣は中央が最も大きい。伝説では、この教会の創設は、聖ペテロがローマへの旅の途中、オートラントに立ち寄ったことに由来する。

③ 壁画に対する所見

円蓋、アーチ、後陣など壁面すべてに時代を異にする壁画断片が継ぎはぎにのこっている。中央後陣には「聖母子と2天使」、その上に「受胎告知」、天井の半円筒ヴォールトには左右6人ずつの座像で「12使徒」が描かれている。その左下にはイスタンブールのカーリー修道院の印象的な図像を思わせる「リンボ（冥府）のキリスト」（アダムの手を引くキリスト）、左後陣の天井ヴォールトには「弟子の足を洗うキリスト」や「最後の晩餐」が描かれており、ほとんどが欠損している右ヴォールトとは対照的である。ただ、右後陣入口アーチの上に描かれたヨルダン川の流れに立って全裸で洗礼を受けるキリストは3人の天使とともによくのこっている。（写真参照）多くの画像にギリシア語の書き込みが見られることから初期の壁画制作は9-10世紀と考えられている。中央円蓋を支えるペンデンティヴ（四隅の球面三角形）には、それぞれ四福音書記者像が、円柱がアーチを支える柱頭にあたる部分の各面には、聖人や教父たちの頭像ないしは胸像が描かれているが、時代的には新しい。

④ 保存状況

狭い室内は四方の窓から射し込む光で思いのほか明るく、鑑賞には最適であるが、南イタリアの強い日差しに常にさらされていることは壁画保存の立場からすれば問題である。

平面図

